

子どもたちに伝えたい世界の今

紺野美沙子

最初

初、UNDP親善大使の依頼を受けた時、私に何ができるか不安でした。しかし、無報酬のボランティアとして開発途上国を訪れ、環境と持続可能な開発、貧困削減など、UNDPの進める様々なプロジェクトを視察し、そこで見たり感じたことを一人でも多くの人に伝える広報役だと聞き、私なりにできることがあるだろうと引き受けることにしました。

親善大使としてこれまでに八つの国と地域を訪問しましたが、私にとって初めてのアフリカ行だったガーナでの経験を紹介します。そこで出会ったエイズ孤児の少年の言葉が、私の進む方向にヒントを与えてくれたからです。

世界遺産の一つケープ・コースト城は、かつて大西洋間奴隷貿易の拠点、自分のルーツを確認しようと世界中から子孫たちが集まります。港に通じる最後のドアは、再び故郷に戻ることはない「ノー・

リターン・ドア」と呼ばれています。反抗した者が閉じ込められた真つ暗な牢屋の壁には無数の爪跡が残っており、おぞましい歴史の重みに圧倒されました。

アフリカではHIV/エイズが大きな問題で、エイズで両親を失った孤児も増えていきます。首都アクラの郊外、マンヤ・クロボ地区にも、約六〇〇人のエイズ孤児が暮らしています。地域の首長が、一人でも多くの孤児を救おうと、経済的余裕のある家庭の婦人会「クイーン・マザー」に呼びかけ、一家庭に六人の孤児を受け入れる里親制度が始まりました。

そこを訪れた私を、クイーン・マザーたちは、関西系おばさんにも似た、親しみあふれる笑顔で迎えてくれました。生活は決して楽ではないのに、情けは人の為ならず、困ったときはお互い様、儲けたお金は皆で分けよう、という太っ腹のガーナの人びと、日本では薄れている地域の強いつながりに、感銘を受けました。

孤児たちと話した時のこと、私の瞳を見ながら「僕は何にも悪くないのに、エイズがやってきて両親を奪っていった、でも親善大使が来てくれたから、僕たちはもう大丈夫」と語る少年の屈託のない言葉が、私の心にずしりと響きました。

彼らの生活をすぐに良くすることはできません。でも、同じ地球に同時代に生まれた人間として私にできるのは伝えることしかない、と思に至りました。それが、子どもにも読んで欲しいと願って『ラララ親善大使』を書いたきっかけです。

世界のどこでも子どもはまじめで純粋です。日本では当たり前と思われていることが、一歩外に出るとそうではないこと、快適な暮らしは途上国の協力があったこそ成り立っていることを日本の子どもたちに知って欲しい。それは、将来きつと自身の指針になるでしょう。親善大使は、正直少し荷が重いけれど、子どもたちに伝え続けていきたいと思えます。

- 1 エッセイ 世界へ●世界から
子どもたちに伝えたい世界の今
紺野美沙子
- 2 特集
旅する神がみ
旅する神がみ……中牧 弘允
インドの山車……杉本 良男
京都の祇園祭と御旅所……森田 三郎
青森ねぶた祭……三井 泉
目に見えず、
耳で知る若宮神の旅……笹原 亮二
- 8 モノ・グラフ
バンラデシュ国際子ども映画祭
南出 和余
- 10 地球ミュージアム紀行
広西民族博物館
ネットワーク型博物館の構想
塚田 誠之
- 11 表紙モノ語り
聖人像の輿を先導するラッパ、カーニャ
山本 紀夫
- 12 みんぱくインフォメーション
- 14 万国津々浦々
ジェット＝ダルジの仕立ての技術
渡辺 和之
- 15 時論 新論 理想論
SUKUP AYNUTAR 大阪 OR TA UWEKARPA
若いアイヌたち大阪に集う
北原 次郎太
- 16 多文化をささえる人びと
ブラジル人の交流の場づくり
関西ブラジル人コミュニティ
庄司 博史
- 18 生きもの博物誌
強壯の生薬として珍重された獣
(オットセイ)
佐々木 利和
- 20 歳時世相篇
SILインターナショナル
夏期講座から世界の言語研究へ
菊澤 律子
- 22 フィールドで考える
ごちそうを食べるブタ
中井 信介
- 24 みんぱくウィークエンド・サロン
研究者と話そう
次号予告・編集後記

東京生まれ。慶應義塾大学文学部卒。1980年NHK連続テレビ小説『虹を織る』主演。その後も多数のドラマに出演。舞台『細雪』では、三女・雪子役を好演。テレビ・映画・舞台に出演する一方、1998年、国連開発計画（UNDP）親善大使の任命を受け、カンボジア・パルヌチナ・タンザニア・東ティモール他、アジア・アフリカの各国を視察するなど、国際協力の分野でも活動中。近著に、親善大使として訪れた国や人びとについて綴った『ラララ親善大使』（小学館）がある。8月14日～16日、伊丹アイホールにて「現代能楽集 イブセン」に出演。9月25日、岸和田市・浪切ホールにて、舞台『さんぎょの夢』に主演する。